

地獄ハイキング

M 温泉マイスターガイド・オリジナル!

『鶴見七湯廻り』を巡るコース



お願いとご注意 歩くときは危険がつきもの

- 歩いて実感するのは危険がつきもの。特に地熱地帯は高温の場所です。足元には十分注意を。沸騰している場所もあります。
- 歩くときは足元の準備、水の準備、そして体調と心の準備を。
- 別府では、自然であっても持ち主のある場所がほとんどです。見学するときは、きちんとお願いしてください。



地獄ハイキング

『鶴見七湯廻記』を巡るコース



ハイキングの見所と目的

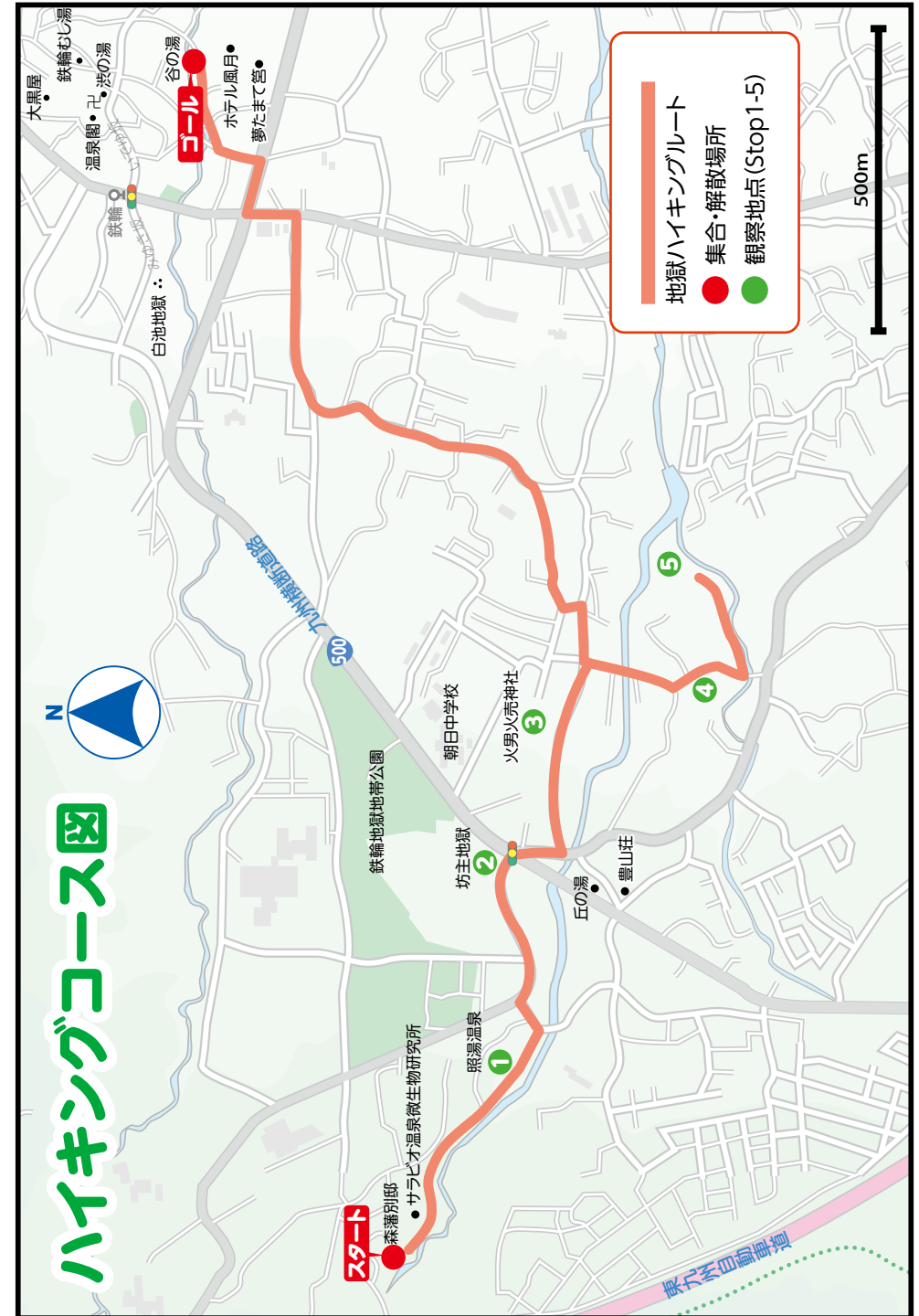


温泉マイスター協会
シニア・マイスター 甲斐 心也

『鶴見七湯廻記』は江戸時代末期の弘化2（1845）年に、豊後森藩によって作成された豊後国速見郡鶴見村の地誌です。鶴見村では特産品の明礬が藩の重要な収入源でした。隣の野田村は幕府の直轄地でしたが、天保の改革で野田明礬も森藩の預かりとなりました。森藩八代藩主がこのことを記念して、温泉地としての照湯の開発を命じ、一大温泉保養施設を作り上げました。照湯の繁栄の様子と村内の七温泉の由来、名所旧跡や特産品を、絵と詞書で作成させたのが『鶴見七湯廻記』なのです。

『鶴見七湯廻記』には①照湯の湯、②宮路の湯、③伊麻井の湯、④明礬山の湯、⑤とびの尾の湯、⑥壺の湯、⑦谷の湯の七湯と、①明礬地獄、②山田地獄、③照湯地獄、④円内坊地獄、⑤今井地獄、⑥鬼石地獄が記載されています。

このコースでは、七温泉六地獄のうち四温泉+1、三地獄を巡ります。



ハイキングコース

- スタート 森藩別邸
↓
Stop 1 照湯温泉
↓
Stop 2 天然坊主地獄
↓
Stop 3 火男火売神社
↓
Stop 4 今井温泉、今井地獄
↓
Stop 5 竹の内第 10 幼児公園
↓
ゴール 谷の湯

Start 森藩別邸



今回のスタートは森藩別邸です。

江戸時代末期の天保年間に、豊後森藩により、「照湯温泉場」が拓かれました。一のゆ・二のゆ・三のゆ・蒸湯・飛泉のゆ、そして湯治のための宿泊施設なども整備されました。

この湯の効験は、鬱気、上逆（じょうぎゃく、気が下腹から上部へ発作的に突き上げてくる症状）、頭痛、腰痛、筋攣（筋肉のけいれん）、折傷（くじき）、疝癥（下腹部や腰がいたむ病気）、痔瘻、五積（体の冷え）、六聚、眼病、痲症（しびれ）等也、と記されています。

1 照湯温泉



現在の照湯温泉です。

姫湯の浴槽の石材は、江戸時代のものだそうです。

噴気を湧水に当てて温めた噴気造成泉で、時として硫黄の湯の華が舞うことがあります。

浴舎の外壁に掛けられた般若の面は、今の照湯温泉の竣工記念として、久留島家の子孫から送られたものです。

坂の下に閻魔像がおまつりされていますが、「鶴見七湯廻記」では坂の頂上に惣門があり、その傍らにおまつりされています。

2 天然坊主地獄



別名、円内坊地獄ともいいます。

その謂れは、「今から521年前(1498年)に日向灘地震が発生しました。その際に現・天然坊主地獄の場所にあった延内寺という大きなお寺の地面が爆発。地が裂けて熱泥が噴出し、寺院は住職(円内坊)もろとも吹き飛びました。そこに生まれたのが『天然坊主地獄』。園内の一番奥にその爆発跡があり、当時の爆発がいかに大きかったかを知ることができます。」(坊主地獄公式HPより)

大地震による爆発の後、園内のあちこちからポコッと湧き上がる「泥火山」が生まれ、場所を変えながら今も湧き続けています。

3 火男火売神社



「鶴見岳の男嶽・女嶽の二峰を神格化した火男神、火売神の二神を祀る神社。867年鶴見岳が噴火した際、それを治めた神社であり、噴火によって出来たとされる別府の地獄、温泉の守護神としても知られる。延喜式内社（延喜式の神明帳に搭載された官社）である。」（火男火売神社HPより）

鶴見岳山頂に上宮がまつられ、中腹に中宮の御嶽権現が祀られています。

『日本三代実録』に噴火を鎮めるためにここで大般若経が読まれ、その効により従五位上が授けられたと記録されています。

4 今井温泉、今井地獄



『鶴見七湯廻記』に描かれた今井地獄

今では地区の共同浴場の一つにすぎませんが、江戸末期には一反歩（約1,000平方メートル、300坪）にもおよぶ地獄地帯でした。

『鶴見七湯廻記』では、もくもくと噴気を上げる今井地獄の全体像と、地獄の噴気を使って調理をする様子が描かれています。江戸時代の地獄蒸し調理を描いた貴重な史料です。

5 竹の内第 10 幼児公園



『鶴見七湯廻記』では、「宮地の湯」という温泉が紹介されていますが、このあたりがそれに当たりそうです。「鶴見社神林の中に湧き出る」とあり、火男火売神社の社叢は、現在よりもかなり広がったようです。

湯坪は2つあり、下の湯が『豊後国風土記』の「玖倍理湯」と記されています。

春木川の対岸に浩然亭という浴舎を建て、川沿いの砂の中からかすかに湧き出る湯を注いでいるが、これが玖倍理湯の湯源であると書かれています。

Goal 谷の湯



平田川の左岸に湧く湯で、今も存在します。

『鶴見七湯廻記』によれば、「明礬山より(平田川が)流れ下ること十八町あまり、溪河の下流で、北中本村の北にある。

この湯は春の三月末から四月初めに湧き出し、秋の九月末には出やめる。

礬気はあるが、明礬山からはるかに下ってきたので、その気は薄く、湯もやわらかでよいのだが、隣に鉄輪の温泉場があるため、旅人はみなそちらで浴するので、村里の者でなければ入浴する人はいない。」と記されています。